

## DX つれづれ草

小林良夫 (JSWC-304)

### ベリ獲得の秘伝

お正月・初夢・ベリ<sup>1</sup> とこういきなり並べたのでは、いまなお流行のクイズでも出て来そうですがもうすこし身近かなお話し。

1月2日の朝みる夢を初夢というのだそうで、このとき何かスバラシイ夢を見ると、その年にキットよいことがあるという。もしこれが本当なら、火星あたりからベリの来た夢でも見た人は今年1年DXから無数のベリが届くこと請合というところだが、そうばかり行かぬところが浮世の習いとか。

今年1月2日の夢見が悪かった人はもちろん、FBな初夢を見たからといって、神通力が通じると限らないとなれば、珍局のベリを手に入れる秘伝を知りたくなるのが人情。

VAC<sup>2</sup>ランキングのベスト・テンに入っているような方は、それぞれにレポートの出し方に工夫をこらして、いうところの「レポートの命中率」を上げる苦心をしておられる。それだけに、その方法はみな「秘中の秘」であって、そう簡単に教えて貰えない。

まあ、その秘伝の奥義とまで行かなくても「秘伝入門」ぐらいのところは、だんだんに探り出して御紹介するとして(こんなことを書くと、いよいよ教えて貰えなくなるのですが)今日はそのイロハ。

別にベリの出しおしめをするのではないが、なかなかベリを送ってくれない放送局と、その反対に、ものすごく気前のいいところがある。ここのところを心得てないと、かなり損をする。

大ざっぱにいうと一番サービスのいいのがヨーロッパで、次がアフリカ、北米、大洋州、アジア、そして一番悪いのが中南米ということになるのではないだろうか。

確かに、生れてはじめてのレポートを中南米へといったことをするのは、おすすめできない。ただし、エクアドルのHCJBは例外といえる。一般に、キリスト教放送局はサービスがよい。

オーストラリアでは少なくとも15分の受信が確認できないとベリをくれない。そのかわり、これ以上受信したことが確認できれば、時に半年以上かかることはあっても確実にベリを送って来る。

念のために付加しておくが、ここでいう「受信の確認」のできるレポートとは、単にmusicだとかtalkだとかでは不十分で、音楽番組ならなるべくそのタイトル、それと共に中の曲名 といっても全部はわかりっこないから、わかっただけ並べる またtalkという表現は避けて、ニュースとか解説とか、さらに内容も1つや2つの項目ぐらいは書いてやらないといけならしい。

と、こう書くのは何でもないが、イザとなるとこの点が悩みの種であるのはベテランとても同じことで、しかも常時強力に入っているだけに、かえって始末が悪く、オーストラリアで日本語放送<sup>3</sup>をやってくれたら……という声も出ようというもの。イヤ、これはチト筆がすべったようで……。

やはり「レポート第一号」を送るのはスイスかスウェーデンあたりが無難かも知れない。しかし、これらの放送局には極東向・日本向の時間があるのだから、その時間を、できれば何日が聞いてからレポートを書くことが礼儀というものである。(まずGuide<sup>4</sup>を見ること!)

<sup>1</sup> Verification Card. 受信確認証。必ずしもカードとは限らない。カードの場合はQSLカードとよばれることもある。

<sup>2</sup> JSWC(日本短波クラブ) 会員が受領したベリの枚数をランキング付けして、会誌に毎号そのランクを発表していた。

<sup>3</sup> 当時R. Australiaはまだ日本語放送を開始していなかった。

<sup>4</sup> JSWCの英文による会報。会員による受信レポートが周波数順に並べられている。

どうも新年早々話がかたくなりすぎたが、ここでペリの裏話の一席を.....

先頃、ヨーロッパの某氏が JJY の 20MC のペリを取ったと報じられた。JJY が 20MC に出たとは初耳。さっそく調べたが、そんな事実は無いという返事しか得られなかった。

そうすると、このペリの正体は? ということになるわけだが、誰かがうっかりとレポートをそのまま信用してペリを出してしまったというのが真相らしい。

ペリとはかくの如くアヤシゲなものだから、自分はペリは貰わないという人はそれもよいかも知れない。しかし、はじめて聞いた DX の感激を、いつまでも思い出させてくれるものがペリのほかには無いとしたら、やはりこれだけは手まめに、几帳面に集めておくべきものといえるだろう。(1月号)

## 「偉大なる例外」

ペリのサービスのいいヨーロッパの中で、これはまた「偉大なる例外」が一つある。

「当放送局は受信レポートに対して受信証は発行しない方針です。理由は、当放送局の番組は世界の多くの局で中継されるため、どの局を受信されたのかを確認することが困難であるからです」というのが、当の BBC のいいぶんである。(昨年あたりから BBC 日本部のメンバーの写真を送ってくるようになり、これが一部の雑誌に「BBC のペリ」として掲載されたが「BBC はペリを出しませんので、その代りにこれをお送りします」という文面に明らかなように、これはペリではない。念のため)

当然「BBC にペリを発行させる運動」が考えられてもよさそうなもの。しかし、そうは問屋がおろさないところに「DX つれづれ草」のタネが生まれてくる。世の中はうまく出来ている!

先日お会いした BBC 日本語部長レゲットさんは King's Japanese(King's English というのをモジったのですが...)でこういってました。「受信レポートをくださるのは大変ありがたいけれども、その大部分はただ聞えましたというだけで、実はあまり参考になりません。たまに意見を書いてくださる方があっても、ほとんどがお世辞で、本当に有益なレポートというのは、めったにお目にかかれません」と。

こうした傾向は、日本の DXer に限ったわけではないので、世界的に有名なニュージーランドやスウェーデンからの受信レポートも同じだというのは、まことに不幸中の幸いかも知れないが...

「放送」とは「プログラムを送る」ものであるからには、われわれはその内容を聞かなければならない。しごく「あたりまえ」なようで、それが「あたりまえ」でないところに問題がある。

だれにだって子供の時代がある。「はじめて作った短波受信機で、はじめて聞いたのが他ならぬこの放送です」というのなら、そう正直に書いてやるのがいい。それならば、ただ「聞えました」というレポートでも意味が全然違ってくる。しかし、いつまで子供であってはならない筈。

とはいうけれども、本当に放送局にとって有益な意見を書くというのは、はなはだもって難しい。「リクエストによる音楽番組を作ってほしい」と書いてポストに入れて、さて帰って来てスイッチを入れたらリクエスト番組の放送中 などという失敗をしないためには、2日や3日聞いただけでは意見など書けるものではない。しかし、放送局の側ではそれを、ほとんど絶対といっていいほどに、要求しているのである。放送局が常に「聴取者にとって有益なプログラムを、聴取者が聞きやすい状態で」放送することに努力している以上は...(と、こう書いたのには実は裏がある。それは(来月)。

ともあれ「聞えました。ペリをください」式のレポートが大部分を占め、そして一方、世界の如何なる地点でも良好に受信できる放送を続けているという自信を BBC が失うような事態が予想できないとなると、どうやらこの勝負 BBC の勝に終ってしまいそうに思われる。

---

さて、これからは内緒の話。

実は BBC はペリを出している。といえれば眼の色を変える向もあると思うが、日本でも何人かの人(ペリ・レター)を持っている。もちろん BBC 中継の VOA の C を VOA の方から貰ったというようなゴマカシではない。正真正銘の BBC 発行のペリである。

行数がつかまって、ゆっくり説明できないのが残念だが(ズルイね)ペリとして必要な事項は何と何であるかを、もう

一度ゆっくりと(先入観にとらわれずに)考えてみれば、おわかりになると思う。

といっても、このLたるや完全なものを貰う確率は非常に小さい。しかしとにかくゼロではない。

要するに SWL は BBC に手玉に取られている。これだけ貫録のある放送局は世界に BBC 一つしかない。「偉大なる例外」というユエンである。(2月号)

## レポート分類学

今月は方向を変えて「レポート分類学」と行くことにする。

ペリをもらうために放送局へ送るレポート なんでもないようで実は千差万別。レポートされる方はご存じない筈だが、受取る側から見ると、よくもこんなにピンからキリまであるかと思うくらい。

昨年の JSWC5 周年特別プロのレポートの中には、アナウンスの言葉を全文速記したという、ものすごいものまであったというから、上には上が(イヤ下には下が)あるものだが、今回の分類学はレポートの山の中から無作為に抽出したらおよそこのくらいになるだろうという、いわば「一般分類学」。

ハガキのまん中にただ一行「カードを送ってください」(カタログじやあるまいし、この人、ペリをどんなふうで考えているのかな? そうそう、この間は「カード送れ」ってのもあったっけ。それに比べれば「送ってください」というだけマシな部類かも知れないが.....) およそ 2%。最低級。

「月 日 時から Kc で貴局を受信しました。カードをください」(あなたがそうおっしゃるんですから、たしかにお聞きくださったとは存じますが、どんな番組をどんな状態で聞いたのか位は書いてくださいな。アレ、ちよつと待って。あの日は、その時間まで放送してませんでしたよ。ハハアやっぱりどこか他の局とお間違えらしいですね) およそ 3%。こういうのに限って、うっかり握りつぶすと「なぜカードをくれないんだ。もう聞いてやらない」と来る。だいじなお客様。困るネ。

「日 時から Kc の番組を聞きました。カードをください」(疑うわけじやありませんが、新聞に出ている番組だけ見て、聞いたことになさったと思えないこともないですな) 35%。

「次のように聞きました。ペリを頂ければ幸いです。日 時 分から Kc で受信。番組はニュース。人工衛星が月に届いたこと。JSWC の会員が 1 万をこえたこと。その他。分から天気予報。東京地方は南の風晴、夕方には人工降雨がある(!) 分希望音楽。トップは私のリクエストでした.....」(たいへん結構なレポートです。それに長時間までお聞きくださいますと本当にありがとうございます。エエ、もちろんペリはさっそくお送りいたします。ですが、こちらの注文を申上げれば、この時間、お宅のあたりで十分強力に聞えているのは先刻わかっていますんでね。せめて御希望の音楽をお聞きになっての感想くらい書いて頂けませんか? イヤ、そうむずかしくお考えにならなくていいですよ。あれはレコードが 3 種類ありますんで、一番新しいのを使ったんですが、お気に召したかどうかだけでも伺いたいですね。あなた一人でお聞きになったのでしょうか。それともお友達と御一緒? ア、そんなに大勢で集つて.....。それはありがとうございました。それじゃ、あのレポートの終りに「20 人ほど友達を集めて、みんなで聞きました」とだけでも書いておいて頂けたら、こちら嬉しかったんですがね) ちよつと筆がすべりすぎたが、この型のレポートがおよそ 50% を占めている。春の午后など、こうしたレポートばかり見ていると、ツイあくびの一つもしたくなって来る。楽しかったか、つまらなかったか、せめて一言でも書いてくれたらいいのに。さて、残りの 10%(あるいはそれ以下) が本当に放送局にとってありがたいレポートということになる。というところで残りが少なくなったので先を急ぐが、その 10% の中に何枚かはクラブのレポート用紙が入るのは嬉しい話。だから放送局のペリの係はかならず JSWC を知っている。

しかし、放送局側のペリについての認識はまだまだ低い。おソマツなレポートをする側にももちろん責任はあるけれど、国内中波局で完全なペリを出しているのは数えるほどしかない。広告のマッチと同じに考えているところが大部分。だから見学に行くと何枚でも渡してくれる。

終りに常識のなさを示すケツ作を一つ。3月27日 J0AK-FMX「NHK の QSR カードの係にレポートを下されば QSR カードを差上げます」QSR という Q 符号がなかったのは不幸中の幸! (4月号)

## DX 第 1 号

昭和 33 年 7 月 9 日、WWVH の警報は W2 を出しているけれど、9620Kc サンパウロの R. Nove de Julho(つまり 7 月 9 日放送局)の受信状態は今日も良好。「50 年祭祭典の歌」が流れて来る。サンパウロは今日も晴とのこと。

さて話は 13 年の昔にさかのぼる。昭和 20 年の今ごろといえば、空襲に明け空襲に暮れた時代。そのころのある夜が今にして思えば私の「DX 第 1 号」の記念すべき日であった。もちろん、そのころは DX などという意識もあったわけではなし、また正直なところ DX どころではなかったけれど...

当時は全国的に同一周波数放送が行われていたから、ちょうど今の NR チャンネルや PR チャンネルを聞くような感じで、しかも受信機はよくて高一(スーパー式でない、ストレートの 1-V-1)だから今のように高 1 中 2 のスーパーにイザとなれば Q5er やら ANL やらと七つ道具を揃えてかかるのとはだいぶ事情が違っていた。

とにかく、ある夜、何となくそんな気になって(そこには一種の好奇心と、それにもまして「怖いもの見たさ」が手伝っていたように思うが、)30 分か 1 時間か、あるいはもっと長い間ネバって、信越・北陸からさらに舞鶴などの警報放送(正式にはたしか防空放送といていた)を聞いたものである。

しかし、それが何月何日であり、周波数がいくらであったか、知るよしもない。記憶の糸をたぐると時計が夜中の 1 時か 2 時をさしていたことだけは、どうにか思い出せるけれど。

なにぶん、ペリを貰うなど思いもよらない。それどころか、こんな DX を受信したことを口にするさえ、はばからなければならない。そうした空気が世にあふれていた時代であった。

それから 18 年。民放ができ、テレビの電波が全国をカバーし FM の時代が来ようとしている。

そして放送局に今日もうず高いレポートの山。その何枚かに「これが私の受信機での DX 第 1 号です」などという文句が書かれている。

スーパー受信機で国内中波局を聞くのなどは、DX のワクに入らないという方もあろう。たしかに特殊の例外を除けば、夜間国内の中波局は聞えてあたりまえ。それを DX と呼び、レポートを送り、ペリを貰うことなど、意味がないともいえよう。しかし、しかし、いくつになっても幼い日の思い出のアルバムのページをめくるのがたのしいように DX の道にふみ出して行く第一歩の、いわば DX の赤ん坊時代の思い出を、はっきりと残しておく意味において、国内中波局のペリ(幸か不幸か完全なのはごく少いけれど)集めは、それなりの意義を持っているのではないだろうか。

いま、誰にも遠慮することなしに、好む放送を好む時間に受信し。レポートを書き、そしてペリを手にするのできる若い人たち。あなたがたは、それをごく「あたりまえ」のことと覚えておられるだろう。それでいいのだ。それでなくてはならないのだ。

しかし、私は。あなたがたが幸福だと思う。うらやましいと思う。なぜならば(この気持はわかって頂けないだろうが)私の DX 第 1 号はあまりにも変則な世の中の、あまりに変則な放送を対象にしたものであり、そしてそれゆえに、思い出といえば耳の底にかすかに残っている防空放送の各地各様のブザーやベルの音と当時の受信機・局型 123 号のあの物凄いハムばかり、それらもやがて思い出のかなたへ消え去ろうとしている.....

受信・1951 年 9 月とタイプされた「私のペリ第一号」をスイスから受取ったのは、それからのはるか後のこと。その 1~2 年前に、はじめてスイス放送を聞いた感激はまだはっきりと憶えているがこれはもはや「私の DX 第 1 号」にはならない。(7 月号)

## 迷レポート

私は「このごろの若い者は.....」という言葉が嫌いである。だから、OM ツラをしてこんなことをいう連中には、それこそ目に角たてて抗議する。

しかし、今回だけは。あえて申上げさせて頂こうと思う。あまりに非常識なレポートが、ますます増えて行く傾向にありすぎるから.....

いわく「QSL を送りますからログを送ってください」。いわく「受信しましたらレポートをください」。放送局からではなく。実に放送局へのレポートにこうした迷文句が書かれて堂々とやって来るのだから話はややこしくなるというもの。

それも一通や二通ではない。多い日には何パーセントもの「迷レポート」にお目にかかる。

どんなことにもせよ、いわゆる術語というものはかならずある。しかし DX の世界ほど術語ないし略語の多い、いやまるで略語の集りのような世界も珍しい。そのことは、よくわかるけれども、しかし略語をデタラメに使っては困るのである。

はじめのうちは「まだ初歩の人だろう」「ずいぶんソソッカシイ人もいる」で済ましていたけれど、そのうちだんだん心配になって来た。たとえば学校で英語の試験のときなど、この人はどうしてるんだろうという、よけいなオセツカイかも知れないが、気になって仕方がなくなって来たのである。

こうした迷レポートでは、受取る放送局の側でも正直なところ迷ってしまう。「ハハア、カードが欲しいのだな」とカンを働かせてくれるのは、よほど親切な特殊ケースと考えてもいいのではないだろうか。「BF サービス局」を「FB サービス局」にするには、レポートも FB にして頂かなければならない。放送局のペリ担当者の親切にばかり頼られたのでは頼られる側はたまらないから……。

QSL、ログ、レポート、ペリ、スケジュール、プログラム、等々の意味は JSWC 会員ともなればご存じの筈であるが。案外わかっていないのは S/on、S/off である。

Guide にさかんに出て来る S/on、S/off。もちろんこれは略語で、正しくは Sign on、Sign off であるが、これはけっしてタダの「開始」「終了」ではない。一口でいうのがなかなか難しいが、要するに「送信開始」「送信終了」とでもいえば、少しははっきりするかも知れない。ここでいう「送信」とは、プログラムには関係ないこと、もちろんである。

たとえば、9515kc の KNBH は火曜から土曜には 1730JST(0830GMT) に S/on する。このとき「Signing On」のアナウンスが出ることはご存じの通り。そして 1730 国連の英語、1745 国連の日本語、1800 国連の中国語と進んで 1830 からは VOA のロシア語となる。つまり 1830 までと 1830 からとはまったく別系統のプログラムになるが、1830 には S/on、S/off はしない。1830 はプログラムの切れ目であっても送信は切れぬから……。

念のためにつけ加えれば 9515kc の KNBH が S/off するのは夜中 0030JST。「Signing off」のアナウンスをこの周波数で聞こうと思えば、この時間まで待たなければならない。その間、言葉は変わっても送信は続いている。

以上、クドクドと述べたが、現実に「11725kc の BBC:FES、2000JST に日本語 S/on」などというレポートが舞い込むということから、どうしてもクドクド書かなければならないユエンを、ベテラン方もご承知いただきたい。

そうはいつでも、なかには S/on といっていまいかどうか迷うような例もある。S/off といいながらキャリアも切らずに試験電波のレコード。それが終わるや否や、S/on とどなって次のプログラム。これを S/on といえるかどうか……。すべて定義というものは難しい。

あぶないと思ったら略語を使うなというのが、この迷論の結論かも知れない。

(10月号)

## パチカン放送局の日本語放送

まったく寝耳に水でした。パチカン放送局が日本語放送をするなどは……。

それも短い期間のテストとあれば、万障繰合せて迫りかけないわけに行きません。因果な商売だとコボしていてもはじまりませんから。

10月27日の夜のことで。今夜からは1945開始というわけで(Guide 10月号 16頁参照)この日ばかりはテレビの「私の秘密<sup>5</sup>」もスイッチ・オフしてワッチにかかります。

21Mc バンドの上の端、21740Kc にまさしくキャリアが出ています。SINPO コードで S4。これは FB! 念のために 17Mc に下りてみます。17730Kc のジャミングと 17740Kc のソ連局にはさまれて 17735Kc は大分苦しいなと思ううちに、おなじみの IS が出て来ました。

どう考えても 21Mc の方がケタ違いによいので、また 21740 に逆もどり。ところが、こちらはまだキャリアだけです。時計ははや 1945。

ダイヤルは間違いなく 21740 です。よくよく聞いてみますとキャリアの底の方で何かしゃべっています。日本語です。もう 1 週間おなじみのパチカンのアナウンサーの声です。と思う間もなく、その上から 1000 サイクル<sup>6</sup>がのって来ました。

<sup>5</sup> NHK で放映されていた、人気クイズ番組

<sup>6</sup> 短波放送局が、S/on 前に受信者が同調しやすいように数分間 1000Hz の信号音を流す

あわてて 17735 へ引越しましたが、頭の方 1 分ほどがみごとに取りそこないです。

何のことはありません。同じ 21740Kc には BBC の日本語放送も出ていることをつい忘れていたのです。S4 で来ていたのは BBC のキャリア。開始は 2000 ですが、早目に出ていたのです。

それにしても両局の技術のすばらしさ。ゼロ・ビートとは申しませんが、ほとんどピタリでした。おそらく 50 サイクルと違ってはいなかったでしょう。ただ S の方は BBC が段違いに強かったため、パチカンの日本語は残念ながら下積みとなって、実用にならなかったという次第でした。

21740Kc という周波数は、よく日本語放送の出る波です。朝は VOA、夜は BBC。どうしてこう揃ってこの波を使いたがるのか知りませんが、偶然にしては、チト話がうますぎます。

その上にまたパチカンが割込もうというのが、虫がよすぎたともいえるでしょう。

いや、そういうことは、パチカンのテストのスケジュールを見たトタンに気がつかなければならない筈。そんなことにおかまいなく私の方はそれはそれ、これはこれと、出たとこ勝負をやっていたタタリが、ここに至って現れたわけです。とにかく大失敗でした。

いいわけにはなりません。その翌日、もうベテランの方に加えてもいい某氏が、同じような失敗をやったと聞いて。いささか安心しました。やはり、誰でも同じようなミスをするものとみえます。

それより不思議でならないのは、この 1945 からの 21740Kc のパチカンのレポートにお目にかかったことです。SINPO の O が 3 ぐらいあって、混信は時々ビート……とか何とか書いてあります。それが 1 通や 2 通ではないのです。

ずっと聞いたわけではありませんから、断定できませんが、BBC の 1000 サイクルが連続に出ないで、無変調になっていたとしても、あれほどピタリつぶされていて、O が 3 あったでしょうか。JA のアマチュアは RS がアマイので定評がありますが、そんな悪習を放送バンドまで持込むのは絶対にお断りです。どうも筆がすべりすぎました。

ところで最後に一言。パチカン放送局の日本語のテストは予定を 1 日のばして 10 月 29 日の夜、新法王の決定というビッグ・ニュースを伝えたわけですが、その夜が 9 日間のうちで一番状態がよかったという事実をどうお考えになりますか？ こんなことをいいたすと「ふだん信仰もしないくせに」といわれそうですが、私はそこに、偶然以上のあるものを感じないわけに行かないのです。

(11 月号)

## スポンサーの御好意により

早いものです。この駄文を書きはじめから 1 年が過ぎてしまいました。

いっこう変り映えのしないことを繰り返し書き綴っていたこの 1 年。DX の世界はあまりに大きい変化をとげてしまったようです。

IBRA ラジオが日本語放送をはじめここに世界の 6 大洲から日本語が出揃い、いままたパチカン放送局が本当に「安心して聞ける」日本語放送を正式にはじめようとしています。まったくいままでの日本語放送といえば半分以上が宣伝放送という、ひどい有様だったのですから……。

会員の皆さんなら、もうよくご存じでしょう。世界の放送局 1 つ 1 つが、実にはっきりした個性をもっていることを。そして、さらに突っ込んで考えると、そうした個性が国民性の上に立っていることに気づかれる筈です。

自分の国の主張を、そしてそれだけを表面に押し出している放送を、私たちは「宣伝放送」と呼びます。こうした放送は、たとえその主張に賛成な人が聞いても、長い期間にわたって快く聞くことはできないものです。イギリスの ISWC が行っている世界短波放送局人気投票の結果などを見ても、このことが十分に察しられます。一昨年 JSWC で行った人気投票でもそうでした。

私たちが本当に望んでいるような番組を聞かせてくれる放送局は、それだけ世界的に人気があります。そうした放送をしている国の国民性ということを見ると、平和的な、のんびりとした、いい意味でお人好しの、つき合いやすい人たちがばかりということになるようです。

私たちには自由に世界の放送を聞ける耳があります。年末といい、クリスマスといっっては実にくだらない狂騒曲を繰り返している国内の放送から離れて、静かな、平和な祈りを捧げる海外のクリスマスを身近に感じることもできるのです。

このごろつくづく考えるのですが、いったい放送は誰のものなのでしょう。

少なくとも、世界的に人気のある放送局は、本当に聴取者というものを考え、聴取者のための放送を行っています。いや、こうした国の人たちの国民性からすれば、自然にそうした番組が出来上って行くものかも知れません。

と、こう書いて来たのは実は序曲でして、私のいいたいのは次のことなのです。

ラジオといわずテレビといわず、商業放送局である限り聞かされる世にも不思議な言葉があります。「スポンサーの御好意により時間を変更」「スポンサーの御好意により番組を変更」等々。

いったいスポンサーとは何者でしょうか、放送局が聴取者のために用意した番組のどこかで、自分の会社なり商品なりの広告を入れさせて頂くために、相当の電波料を支払うだけの存在である筈です。

つまり、放送の主導権は聴取者にあり、放送局は聴取者への奉仕者であり、スポンサーは放送局よりさらに下位に存在すべきものです。にもかかわらず実状は、スポンサーが勝手に定めた番組を放送局が作られ、それを聴取者に押しつけているのです。ですから放送局はスポンサーに頭が上らず、ついには「御好意により変更」させて頂く仕儀になってしまうのです。

世界のどこを探したって、こんなバカげたことをやっている例はないでしょう。

放送局の主脳部たるもの、そしてスポンサーたるもの、広く世界の放送に耳を傾けよ！そこにこそ、日本の放送の進歩がある！といいたいのです。日本の国民性とあまりにもミスマッチな番組が作られ、放送されています。少なくとも商業放送局（あえて民放といわずにこう申しましょう）に関する限り。

いや、今度という今度はどうも大変なところにまで筆が滑ってしまいました。それというのも、このところ DX をサボって中波や TV ばかりを聞いたり見たりしているうちに、歳末狂騒曲に巻込まれてツイという次第で失礼しました。

(12月号)

(『日本短波クラブ会誌国内版』1958年1月～12月号に掲載。見出しと脚注はPDF化にあたって、新たに付けた。)